名花

三四

土岐文庫
文庫17
W45
8

文庫 17
W45
8

昭和六十年二月一日 贈
土岐善麿氏寄

01D185145100

万葉考卷三別記

○神名備山三室山　○月名

○眞刻持小鈴文由良尓　手二卷流玉毛湯良羅尓

○雲聚之玉蔭　日蔭　○高々　多加伎奴　八船多氣馬並而高山

○加良　与利　由惠　奈我良　由　物故　○津礼毛無

新宮之印

万葉考卷四別記

○義之（テシ）　大王（テシ）　○八鹽乃衣

○吳藍　韓藍　○惠具　与其　其和為

万葉考巻五別記 嗣出

○宇多手 于稲于稲志 轉

○意具美 心具之 目具之

○梓弓末中三伏一起不通有之

○於能礼故所置而云云哥

万葉考巻六別記 駿出

○佐恵佐恵 佐和佐和 曾和恵 又佐夜佐夜

○宇家良我波奈 志乃愛須寸

○子大葱 大伴駿河万臣哥

宮内省圖書寮

万葉考別記三

○神名備山三室山

神奈備山を神岳ともいふる事。又其社の地などのうへ巻二の別記。

ないへわ。山ゐ。くもゐ。惑あれば。或人の疑ふまに。狂いもん。先

集中ふ。三諸の神奈備ともいふ。神奈備乃三諸ともいふ。又神奈備。或ハ

三諸。とのゐ。もりゐ。とも。ゐ。峯きば。二十五首。ぞうわ。ぞが中ふ

三室とめゐ。云て。三輪の事なる。四首あり。又三輪と神奈備と

別ぐ。きき五首。ぞうわ。ぞ。別ハ。ゆ。ゐ。其餘十六首。ゐ。皆飛鳥の神奈

備。ことゐ。つ事ハ。巻三ふ。今十三神なびの。三諸の山の事。ゐ。飛

島の川などいひ。巻十四ふ長哥上よ。三諸の神ふじ山といひて。未
よ。飛鳥の故さ都といひ。其反哥よ。飛鳥川をよ。其ゐ故郷
乃神なび山真神の原なとよ。今せたるもて。皆飛鳥の里乃
神なびく。又巻十よ。三諸の。神のおだまる。泊瀬川。巻八よ。三
諸の。其山なとよ。子等が手ゆ。巻向山ハなと其近き所の名ゆ
新ハ三輪山と。又ゆれわうらがきとい。五首の中こも。神なびと
のといひ。飛鳥のともて。ゐでこめろとよとたるハ三輪
を云と。何ぞといふに。右よ引がゆく。ところの山なとよ。ところ
の三輪山又まばなどのよ。三輪よ神なびとよ。

記よも三輪を御室といへり。拾遺ばちやさ代[illegible]
三輪。神なびとも飛鳥神社をいひなへるとゆ。○神奈備ふ
事ハ。出雲國造が神賀ノ詞に。大御和乃神奈備。葛木の
鴨能神奈備。宇奈提乃神奈備。飛鳥乃神奈備。とあれば也四所
なりもて。第つ乃神の社なども神なびといふべき事なるをも
やくよりわ。飛鳥の神社とやいひ。いかゝ。ひとの。神の御室
てよも何まの社をもいふべきをや。三輪の社よいひなるハ
せるがめ。且神奈備ハ。神之毛理てよ。之。毛理の約。ゆく。仍
て神奈毛と唱よるもなりて。神なびとも云ゆ。美と備の

清濁相通ハ〳〵云言の例なれば委〳〵ハ祝詞考にいへり。

○或人問古今歌集に龍田川をみぢ葉流る神なびの御室の山に時雨ふる〳〵とよめる歌を公得ね哭す契沖僧が古今注にいへるやう立田山ハ平群郡伊駒山の西につづきたる河内大和の境く高市郡飛鳥の神なび山國の中ゝよりいと南東へよりて倉梯山多武山に近〳〵仍て其高市平群二郡乃間他郡も廻ぐり他川とも横なでに流れて甚うるはしき地く然れば古今集右の歌ハ左の注に又ハ飛鳥川とうるこそ理なるなれ然るを又同〳〵集代端に立田山を越て神なび川に渡る〳〵と書て神なびの山を過て秋なれば立田川に出ぬさそを向るとよめるハ古へ人も地理をバ委しくせざりし物ぞといへるハ誰も思ひおよぶを既古今集の撰者ゝ〳〵しいふと答へ〳〵く凡古へハ歌を設てよまゝ所に向ひよめれバ遠ゝ歌を中つ代の下より歌を〳〵に設よめる故に遠ひの出〳〵く其飛鳥川を立田川と誤ゝ〳〵より山城人も大和の地を志ねどさる事とせしものく此歌ゝ〳〵立田川もみぢ流るてふをそ〳〵におぼゆ〳〵てふ句を作ゝ〳〵後其句ふまをせて端詞を作りし

ほゝ立田をもみぢの多さ山とすれど方葉に神なび山をとゝもらぬの山とゝ〳〵ゝ

なぐ〳〵絶西とひと
しくましのこ
もみぢはよろしを
彼方こやくよりや
誤々貞観乃ほ
時しも立岡川れ
もらぐのるハ家ふ
よみなりる中
つ代より初の実ハ
なくて言ふのこ
よりつゝひぎわぐ
くるれ。みよ〳〵家
故系まぐハ
うさよれること二
あくなりわし
事を。

もれく。此人〳〵といへぐ方をのこよちんゝして古を学ぐざしバ
かゝる事ひぐれのこなゝぐ仏をあわ。ちゝわざゝおもゝ祢ぐ
ゝゝくおゝへばあゝといへる是く。
○或人又問。神名式ゝ。平群郡ゝも神岳神社あれど今を知
人なし。同郡ゝ立田よりハをれて。今人の神南備の岡と
云ちひさゝ岡を。岡の傍ゝ神南寺てふ寺を。其岡ゝ添て小
川を是ぞ立田川ゝと土人いへり。思ふゝ是や平群郡の神岳な
らん。今を神南寺てふ寺もをいぐさりとも。式ゝ神岳と挙られ
しゝふよりゝをんと。巻。奈良へ都遷しまして古の大寺

なぐゝもうつされたりり。此飛鳥の皇神ハ世ゝ崇ゝ恐しー
故ゝ。奈良の宮近くへ其神の御霊(ミタマ)を遷ひ。世人を故つの飛
鳥を遠うれバゝを崇ゝ故ゝ。式ゝも載られてゝんゝ。平安
の宮と成ゝ。春日今木などの御霊をうつされ〳〵数多さがく
成ぬ。然まバゝれ古今集ゝ飛鳥川もゝぐどなぐゝてふ歌と
好事の立田川と唱へて。神岳の方とせ〳〵をやくより
立田川よりくゝ。本を正ぐで古今集も誤ゝをんゝ。

○月の名

年月より志波須ぐの月ごとに名ハ多く此集ゝよりぐれしバ

孤昭が説まもとる
由あるてふるとも
由ハ由来なきれ
バ学ハかるべかれ
ど義と義とを勿へ
て言を解ハかゝ
例ゝ系古ハ五十
音をかゝて仮
と家と合せ解と
ちれバ此ものそ

古へよりふ名くゝりまづむ月ハ親む月さけ〳〵きゝ衣更
著（キ）などりゝ意とちるハ後世人のゆゝりなゝ思へるこゝぶも
ゝゝ古への言を解道ゝあゝぶ仍て今考へ云事左ねごとし
かゝて常ふりふ物の名ハ言少なゝぶ〳〵ふうまハず故ゝ月の名ハ
甚略さていへゝ其略ハ皆五十連（イツラノ）音もて知べし

○一月を牟月といふハ元つ月てゝ言ゝ毛登てゝ二言を約れ
ば毛の一言と成を牟ゝ轉ゞて牟月といへり言の例をいちゞ
集中ゝ毛登莫てゝ言ハ本無と云意ゝ〳〵なきハ空ゝ事
なれバむなゝく時ゝ〳〵むなゝく憑ゝ〳〵事なき無ハ時ゝ

なゝ〳〵へり是を以て本（モト）と武（ム）と言の同じきを知べし

一年ゝ月の始ゝれバ是を元（モト）つ月といへる事日の始を元（モト）つ
日とりゝ義（コトハリ）をもむゝおゝ〳〵月ハ君臣親族親むゝ〳〵ゝれバ親む
月とも云べゝ仍ゝれど暑言ゝあれ本
言と皆暑て下の辞のゝを以ゝ〳〵例あゝ
や又十二の月を名づけゝ例ゝも合ねばゝゝ

○二月（フタ）を伎佐良藝といへハ木草発月（キクサハリツキ）て一事ゝ伎佐ハ伎久佐
の久を暑き良藝と波利ハ韻通てりゝゝを弥生ゝむゝ名ゝ
是を衣更著といへハ言のいひちゝにこうられ此月ハ本
名とおもふハ言と言ふ別もあゝもおゝ名ゝ

○三月（ミ）を也與比月といへハ木草弥生月てゝ事ゝ木草左ふゆ
づゝてゝ暑き也ハ以也の暑ゝ與ハ於ゝ通ハ比（ヒ）本のまゝ

藝の濁と利と通
ふハ良利面礼呂ハ
本ゝ濁の書なれ
バゝ

いやを暑て也とも
ゝらゝハ百八十八

りて。木草は二月に芽をきざし三月にいやおひに生繁れり。仍て此集に春の繁山春の茂野などいへるが多し。此ふたつの月はむべて意を知べし。

○四月を宇月と云る。空木花月てふ事にて。集中に。宇の花乃咲月立ぬと四月をいひて。ては此月の事となる物故に名におふさて。早苗(サ)月霜月などのもじ。かくて此木を中虚なれば宇都(ウツ)木(キ)といへど其花をうつ木の花といへるを略きてうの花となる。る此月の名に呼時はよく略きてう月といへる。或人は宇恵月なりといへど。植を略ては恵とるゝいへ早苗はきたる五月植るゝ。又種は蒔くといへり。万葉に種生ともいへどおつと訓るゝ。又稲種を蒔は三月にて。四月に或は蒔或は植る所ありもすべかれど。さもなるをこそ月乃名とはせる。

○五月を佐都伎といふは。淺苗月てふ事にて言は。佐奈倍の佐奈の約は佐にて。倍は畧く。且その佐奈倍の佐は。阿佐(浅)乃畧きにて。佐蕨佐百合などの佐に同じ。淺は短く小きをいふにて浅つ葱(キ)浅茅(ヂ)などのもじ。かくて稲苗を植るは天下なべてなる事故に言を略て此月の名とせり。或説に小苗月の略とせれど。畧かんには菜月倍月と相にこそいはめ。末の言をとりて本言を畧くべからねばなり。

○六月を美奈月と云は。神鳴月てふ事にて。加と利を畧けり。此月はなる雷のなりはためくにて十月を神無月てふに對たる名也。後世水無月とするはあやまりにて。或説もあれどいふべからず。

是とてさ苗とははや苗てふるてさやうにも月に称るゝさ稲ごささ田などいへるは若きよしを稲ど。若きとふ古の結じてはてが字もる結用はよし。仍て早苗稲などものなれども其を以て佐月の佐に当るを誤と字は略き記ものとてこそ乃本言にあらず。
○上つ代には神といふ神を名付ともいへるは雷のなる也。成ることもかくこそいへり。

○七月を布美月とゝハ穂含月てゝふるゝ保布の約布ゝ下乃布を畧く五月ゝ植〳〵苗の七月ゝ始めて穂を含めばゝふくむを集中ゝを布ゝ年ゝも保ゝ万里ゝもいへり妹の三月稲もて名付るもきゝなる物なれバゝ

○八月を波月ゝ云ハ穂發月てゝ事ゝ保波の約ハ波ゝ利ハ略く稲穂ハ此月ゝ出発る浅世葉月ゝもゝぢ初ゝ八月もゝぢ初ゝ

こゝ何ゝもゝもゝや もゝぢハ九月の末ゝ

浅世ゝ葉月ゝ葉ゝ

りてゝ〳〵ゝ

○九月を奈賀月とゝる稲苅月てゝふるゝ上の伊と下乃利を畧きく此月ゝ稲ハ苅をもちむるゝ

武人拾遺集ゝ夜を長月とゝ

を元〳〵ハむぐゝ

こゝろ

○十月を加美奈月とゝる雷無月てゝふるゝ此月ハ物ゝ

ゝれこゝ

ゝれバ鳴雷も無とゝ六月ゝ對へ知べし武徒ども

ハ

○十一月を志毛月とゝハ霜零月てゝ事ゝ零ハ畧く

○十二月を志波須月とゝハ年極月てゝふるゝ上の登と下の留を畧く都ゝ須ハ韻ゝ

六月神無月志ゝすの州のゝハ東方呂ゝ

師走ゝ

右の名をもゝ月ゝ年をつる月をむゝ草もゝ生る二つの月と秋の三月ゝ稲ゝをむゝ雷鳴と神無ゝ

こゝろ

月を蔭の

ゝ月を皆

ゝ

いくらかぶ三つ九月のくさ。然まだ一つ二つを挙てハ足ず。よりて
なくべいつり。

○真剣持小鈴文由良尓○手二巻流玉毛湯良羅尓

まきもてる小鈴もゆゆにハ手節(タブシ)に纏へる釧(クシロ)の鈴どもの揺鳴(ユラキ)
く。今本の訓ハ誤れり。又次下の方に手ハ巻る玉も湯良羅よりよ
もよ巻玉訓の玉をいつり。然まだ二つ事の招ハ均しきに。
鈴といひ玉といひ。又日本記に玉足玉といひ。ほ鈴足玉ひ
の鈴といふも各異物ともおぼゆるに依て男ハ一つハ足ホ
を小鈴を付るを。鈴の形ハ玉のめくまるなれば玉とものもいひ

胡和の始つ比。伊勢外宮祢祝宜小田豆殿に小人武蔵秩父郡と約束事ありて。時幾百代経しも古ぶ古比鈴をそ。九鈴のわつかに手脚ちるど足りて小鈴と六つ付て。今も有やうにて男を去て。又上総國より平らく。かるおく鈴五つ付て。又しかあらぬれど。考ずかけうわき。色ちを思ハ今ハ玉印とるも鈴を繕

なけう。然て九き物をたまとりしハ古への例に。今一つハ巻六(今十四)
よ。あづさ弓。末よ玉まき。鈴ぞ。ねもくなりみ。奥をかぬ(カク)
くとよ足るめ。くよ足るも玉と鈴を交へ付る為に。或ハ玉
或ハ鈴とのともるべし。此二つの事ハ玉鈴交へ付るかに
吾ハ依ぬ。○由良尓てハ言ハ記ハ伊邪那(イザナ)岐命。御頸珠(ミクビタマ)之玉緒。母由
良迩取由良迦志(カシ)而。賜天照大御神而。云。又。敏玉の條。奴那登母。
奴那登母ハ。瓊之音の之を那といひ。於登を登くり。母由良尓。母由良尓ハ。真由良に。由良羅に。
ゆゆゆと畧々りうりうと云。振滝(フリスキ)云云。神代記。一書同(ヨキラニノ)(ノミヲニツハセル)(ユ)(ツ)(ミスマル)條に。解其左髻所纏五百箇統之
瓊綸(ヌノ)而瓊響瑲瑲。瓊響瑲瑲此云二乎奴儺等母母由羅尓。(ヌナトモモユラニ)
一〇同下ハ。手玉玲瓏。織紅之少女やそ。たま緒

付し金印ちん
しおがは・無き古へ
万の船を結ぶ
るかはらこのゆ
ひ玉ひの結かお
もいたるべし。

瓊之音真揺みとりて。別巻。四五の末の今本の始まる。人万呂ら集のちはば
皆是 変るもちく別の一巻とす。次まるる巻とは
なり。玉響。昨日夕見物。とるまも玉の音の出なるを妹をまづる
見しふえ。こゝは引まる玉響を出なるまりをもくおもへば玉の
お舗てゆかいさうけるなるをとゝぐしらふ文のいやなり。あし
らのゆゝは音のゝゝ聞也。さればも右の記ふ玉緒モ母由良と
いひ。巻二十ゝゆゝ玉の緒ゝをおもに。揺は本ゝく揺時
音ゝまゝよ二つおねて聞ゆゝなるべし。

○雲聚之玉蔭　日蔭

山玉蔭の玉はかゝまる言。蔭は日蔭の日を畧さりまるは考ま
いひて。日蔭は松蘿成るは巻二。額田姫王のうふいへるかし。

なれ日蔭の鬘の事よは異ちる説もあれば委しくもちる。記
に。手次繫天香山之天之日影而。為鬘天之真拆而。神代記と
ま也今日蔭を鬘ゝをを疑ひ問人はり。おのれいそく日
蔭を鬘ゝをは巻十九ゝ。天平五年十二月二十五日。新
嘗會肆宴應詔哥。少納言大伴宿禰家持。足日木乃。夜麻之多
日影。可豆良家流。宇倍尓也左良尓。梅乎之奴波牟。とる古へ
是を鬘ゝをは知べし。後ゝ延喜式の祀ゝは。組糸を世ゝは
ゝをは。かゝもそれを日蔭の鬘といひて。頃ゝ越ゝり。本よ
ゝ記日本紀ゝ。日影を襁とあゝば。天平の比しも大嘗祭

はあゝ山下日蔭と
いふ。婦川流百首
の苔の名ゝ日影ふ
繫ゝが下ゝ苔も
ゝ。郷の浦ゝ山の奥
かゝらかをいて日影
は繫ゝが下ゝ苔を造
苔ゝゝいふ人ゝ
ゝ。ゝ日影は繫
ゝ二ゝ。ゝ猿
ゝ。ゝ奥
山の繫ゝの中ゝ古
木の枝ゝ生ゝ物な
ゝ。ゝ。

袖を引て無べけれ。又下ふり云よんだるが さこさ袖とまでしも只 奥山にのきあれバ之。地と近こけハ里近 の器柿にも落て 垂ぶるさればさこそ 山下り影といはず奥 山の嵐ハ風強日ちう ければ苔藤の蔓 木ぎ中に古木の 日も風もあらしぬ 枝に生ればしのこ。の苔とよべるぞ。を縁なる地の苔を いさく椰に蔓ことを 助くべき日影ハ いひしのくは影ハ かうら出るちもりいふ べうらと句もせまりの めうしが強てものい ひしこ云ふよわて張 でたちる後世よ好む みて袖の実をとり來よくしれぬハ後世ぞ。

の應製の哥に右のぬくよまんや。式にもあらいちんや。仍て
思ふに。二書ともふかハ真折を縕とし。日影を蘰としてよまし
なる紙いと後に誤て。右のぬく日影を縕まし折を蘰とハまし
之なり。先折の蔓ちくしても強さ拘なれバ縕ともなべく。日影ハ
深山の古木に生る蘚(コケ)にて弱ければ蘰とも無べく縕ハ
なかるべうしてかるぐ理もあらうく。○又問。山かづらといふまも
日影の事とする説をいふよし。答ふ。日影蘰を山かづらとも
いひしなり。巻六(今ノ古)に。安之比奇能。夜麻可都良加氣。麻之波尓
母之可多伎可氣乎。於吉夜可良佐武。とよめるハ。山蘰日影と云

古今の辞に二ツ を吾こそ人こそ あぐら云ハ事をか つ辞ハ苦こそ足 へるそならのハ。

を日を暑きたる事上の哥に同じくさて此可氣を無とんなる
る人まべけれど。次にゆづてさ可氣とあ。即淂難(キ)日影の事
しせぐハ言かなハバ。上の句も無しまハ一首の意解べう
らねバ。日影の事に定まれり。哥の意ハ巻六にみ。これを以て古今六帖
に。まさむくの。おなしの山此。山人と。人もえるがね。山かづら
せよ。射がう人にまるもゆけ駒。神あびの。三室の山乃。山かづら
おんてふも同じくもかげのかづらを山かづらといへる此都べし
○乞を與と誤り。又乞當を與具と誤まるること。
此巻に注せる人万呂哥集の反哥に。志貴島。倭國者。事靈之。

所佐國叙真福在乞曾こは考よいへるぬく祢の幸の言挙して賀よ
るしば命まさきくわわ祢ことと願ことをく
いとさくこそその辨ハ所ことの字と出るこの用
なる事上ついへるぞ。かくてこてハ乞曾と假字よ書たるもと。
今本ハ乞を與ハ誤りの字を具に洪まわ。乞をヨとる逸と與と
書をを字と見るり。下
に。妹に告與具夢尓所見與。なども同じく。告乞曾所見乞。
乃誤に何ぞいとど同意の字ハ。妹尓都氣許曾。夢尓所見社。
なぐ。へる數ならず多し。又下の巻に里遠に恋るびまくわ。ま
を後面うげさしず。爰所見社。と。同爰れ人万呂集ハ入し
をバ夢所見與。と。此與ハ即乞を洪し。右ハ同じ。その外
いと多し。集中をわわ見ばゆ。ゆ成べし。又具ハ集中皆濁

る假字よのこまること知ばるよあるかぎきるゆゆ。け
きに。巻七（今十七タ七ウ）に。曾穂船を。具穂船を次に。旗筲木葉裳曾世
丹を。旗荒木葉裳具世丹。と今本ハ誤まつ。ハ。かくて。まの
もも。ものもも。ものめ。わぎ。

○高々　多加伎奴　八船多氣　馬並而高山

此巻。挽歌。母父毛妻毛子等毛。高々丹。来跡将待。人乃悲。○巻四
に。高山尓。高部左渡。高々尓。余待公乎。待出可聞。おと。豊國聞
乃高濱。高々尓。君待夜等者。左夜深来。など多し。高々ハ遠々
にて言おるよし。此巻の考よいさういへれバつぶ乞て

いちんかくて。巻十三。打渡竹田原云云も。打渡す遠きとつゞ
く事右を以て思ひ定むべし。（冠辞考いさゝか疑ひいひ〳〵いはぎ〳〵かわき。巻八。大
船乎荒海尓榜出。八船多氣吾見之兒等之目見者知之母。こ
の八八孫之。船多氣八其湊より海原へ榜出る船のいよ〳〵遠く
成行ものなるをもて遠く吾見〳〵兒といちん序とせり。まの素八
をも考へよ。巻二十。防人ちゝの奴のこみてがゝ八の保〳〵すしどひや
よかすゝ。於枳豆他加枳奴。これもて遠く来ぬるをたう
きめて〳〵ゝを以て。巻七。馬並而高山白妙丹。今艶色者。（多カキヤマ）（一ホハセヌルハ）
樓花鴨。今本梅也あらふ誤之。これも馬を並べて遠く来といひかけあり。

あれ〳〵のつゞけ上の手どもの例並挙て推〳〵きハ事もれくす
ゆゑ。後人あぐるの一首よのくむひて思ふ有る通〳〵ぬ説の
おもむき〳〵。
又たなくて言〳〵もすゆゑ〳〵ハ生ろ〳〵暮ゝ〳〵言有ることあるぬや
くれどたゝ〳〵ゝるおきて〳〵来ぬるすゝ〳〵ゝとそいかちそ。
○加良　與利　由惠　奈我良　由物故
七巻〳〵。思就西。君自二戀ハ將明。とよゝ〳〵。このか〳〵ハ。從〳〵も
故〳〵もすゆ。何ぞ〳〵ぶまづ有ハゆゑ〳〵もいひて。物のをあわ
因〳〵事をいひて。然れば。上の言ひ意を受て加留我由惠と云
ゝ。此有之（カクアルガヨシ）由て〳〵言ゝ。上さいひ〳〵事を由縁〳〵ていふこと

なし。さて叶ふるがゆゑを約めてかれともいへり。留我ゆゑ乃約れなればなり。
其加礼と加良は音通へり。仍て君加良尓を君由恵尓ともいひ
ても守ゆゑり。又加良と与利と通ひ守ゆるを此(コ)所より彼
彼所より来てをも此と彼を各本としてぞれによりてを
事をいへり。是は右よりの由縁(ヨシ)ての言種く用ゐし。〇二つ尓。
神随(カンナガラ)皇子随(ミコナガラ)などいふ奈賀良は神尓阿留加良ての言也。その奈
を尓阿の約め。留は略く。加良は右に同じて。神に在よりか。神尓
在故といひても聞ゆ。此言日本記にも集にも随の字を用ゐ。
を。即ち此神のまにての事にもあれど。仍て上には考にも別記

なからは尓在からの約まりて云略して後人のおやかすにうて するより共に その用し。

にもまうと云方より解するには言の本といへり。然れば意別
のやうなれどより合ては一つとまたりぬ。三つに。國加良は神から
からといふも國なからし。神ながらの略まて。國にあるから。神尓
在からて言あし事右に拘。次下に倭國者。神柄跡。といふ
同言を。其左に引る人万呂か集に。神在随。とあるしを思ふ
べし。かくてこゝは然るよろしき國のさま。或は神の功(イサホ)なども
上う又下にいひて。其國まで在よりうと云し。かゝれば是もを
國あれ在まといひても意しき。四つに。直尓不往。此従巨(コユ)
勢道柄。このこゆはこよりて。約之。其与利の約は。伊あるを由

に轉じいへるまで。こゝ加良とのひとつに同じきをとり上ていへるが如し。
さて巨勢道からのかくも従に同じ。然るをこゝに唱へ出
て事ぞといふは誤也。姉にはあれど見らにはいかれど並べいふ歌
なども此歌の言は挙一つくらべつべし。○五つには記に空ゆかば
足ゆ行。巻五に水を給(タバ)を妹が直(タダ)手ゆ。此従に同じくて空よりわ。
足よりわきよりわ馬よりもといひ。又各かくもいふべし。是乃ます。
その中まに馬もまにと云てても聞ゆ。右のおちくをいふぞ。異
なるに似て意は聊くしかる。歎之既にいへる須良奈保太尓。
の意に似たるかくして各別なることはかくして人の意に也。かゝる

たゞ故とのみ書て。物故の略なるにいわ。そは巻三に旅宿鴨為留不相君故。又物念痩奴。人能見 故あまゝに。縕不経 加比耳故尓長等恩 伎冬五高麗劔己 之景跡故外耳。

こゝろ多しとやかて解知べし。○六つには物故とこゝは集中に物
故といふことぞ故といふは別べきれど故てふ中には物故とも書き
つと覚ゆるもたまくありそは左にいふがかくて物故は巻三に
對面者。面陰流。物柄尓。女の目けるを。継而見巻能欲公毳。物からは物故は人としきりの上にいへり。
あかる府はいたるかにしてよくもいへれど之をいるでかくまくわしくかれをこそしんと。朝東風尓。井提越浪之。世染
似裳不相鬼故(アハヌモノカラ)。瀧毛響(トドロ)。浪間従雲位尓見。粟島之。不相物故(モノカラ)。吾
所依兒等。あさね物故いふに人の言にいひよすらんといふ。なか総まで一首の中にふたつのことばは自ら聴く。巻四に。椽之一
重衣。裏毛無。将有兒故。戀渡可聞。何んもなくてあるらん人物故とこそもいふゆ。高麗劔。己
之景跡故。外耳見乍哉。君乎。戀渡奈牟。あるげなる物故とかゝ。古へより今乃

いひなしたるも集中に多し。さてこの歌ハ古今歌集
もてはやすべし。そハ哥の本と末とのんを異様にいひなしたるを
らんと思ふいふぞかくハてつらねし一首の中にあれバ古歌
十首あまりもあれど一二を挙ぐ。かくれてハつきこハ色にもあら
なくに。ぬれしまでまびしからん。さてとゆへバ枕にかはせてね
し物さ。ちるなつぬ名の雲にきえん。よるが宿に咲る花さ
ちるらし色ぞうつろふ人乃こゝろん。是らハならびの言のこゝを
まつるすハこれも同じ。又秋ならぬあまつかぜ。女郎花天
河原ニハ生ぬ物なるを鮮かにする人あれバ。右の此集で

仍ていふぞ秋ならぬあまつかぜかきやらせバいはれたるならひあらん。

○津礼毛無

此巻に。磯城島之。日本國尓。何方。御念食可。津礼毛無。城上宮。同巻の末の反歌に家人乃。将待物乎。津烈裳無。荒磯矣巻而。偃有公鴨。此次にも同言あり。巻十四（今ノ三）。新羅尼が死を悲む坂上郎女の歌に。（新羅よりわたりける尼此国にまかりしをかなしみて）都礼毛奈吉。佐保乃山邊尓。哭兒成。慕来益。巻十五。幸難波宮時云云。難波國者。葦垣乃。古郷跡。人皆之。念息（イコヒ）而。都礼母無。有之間尓。などあり。かくて右の。何方。御念食可。津礼毛無。城上宮尓。大殿乎。都可倍奉而。

とゝて。巻二の。日並知皇子命殯宮時。長哥。由縁無。真弓乃岡尓。宮柱。太布座。といひ。同時。舎人等のうた。所由無。佐田乃岡邊尓。云云。これら均しく御殯の宮所仕事をいひて。素因どゝれば。上を挙し四首のつれも。無きを。よしも無く。試るゝ。素皆相かゝるゝわ。然れば。此言の凡ハ是。事ども無て。さゝをれ言の本を思ふ。貫ねも。無てゝ事なゝを。良祢の約礼あれば。都礼といふわ。をつれを常ふハ同遊同行のもれよりハ。軽きがめゝ。男一人をゝ。女れど。京人を京の貫属。國人ハ國の貫属を公よ定給ひめれば。親族も皆四貫ゝ。重く。弘き言ゝ。且由縁貫属ハ遠き同事と成る。

も思ふべし。

此つれもすさを中学のわりよりわハ。憲ともれよりしなき。

然ゝゝゝゝ。つれなき人といひなせしを。古へハ。ゝれど。

右の因ゝく貫無よりわ軽ぜしものと守ゆ。然るを後の人ハ。

なゞ其軽ぜしが上よ附ゝく。此云よ。強面不新面。おゞの字

を加てさる事ゝものを思へゝゝ。尾よ付て也る蟲。アヂ。なゞ。

巻二十、詠むるもの、そゝよくきさ〻加多米等之いもが紐、わよくさ米うも、此くゝもて〻かきと方こゝふちうゝのゝ、

万葉考別記四

○義之（テシ）大王（テシ）

此巻ゝ、朝宿髪、吾者不梳（ケヅラジ）、愛君之手枕、觸（フレテシ）義之鬼尾、○印（シノ）結而、我定義之、任吉乃、濱乃小松者、後毛吾松、○巻五、大海之底乎深目而、結義之、妹心、疑毛無、○巻十三（今ノ四）、四十一枚、石上、零十方雨二、将関哉、妹似相武登、言義之鬼乎、○巻七（今ノ十）、七タ哥、持月日、逢義之有者、別乃惜有君者、明日副裳、欲得、○巻八（今ノ七）、寄玉、葦根之、懃（ネモコロ）念而、結義之、玉緒云者、人将解八方、○巻四（今ノ十）、二十二枚、黒髪、白髪左右跡、結大王、心一乎、今解目八方、○巻八（今ノ七）、世間、常如是耳加、結大王、

白玉之緒絶樂思者。うれ〳〵の義之も大王も氏志てゝ辨ゝ書
しものぞ。何ぞといそぐ。○巻三ゝ。枉言哉人之云鶴。玉緒乃長
登君者。言手師物乎。○巻四ゝ。菅根側隠君。結為我紐緒。解人
不有。同巻。味鎌。塩津乎射而。水手船之。名者謂手師乎。不相將
有八方。○巻五。住吉之敷津之浦乃。名告藻之。名者告而之乎。
不相毛怪。○巻十三。不念常。曰手師物乎。翼酢色之變安寸。吾
意可聞。この歌もれん河皆上ゝ挙しあごもゝ拍しさて氏
志てゝ辨の氏そ。多里の約知なるを豆ゝ軸ゝ〳〵ゝ〳〵ひ
きわし。むをびたわし。とゝゐて皆かちゝ方。ゝ右ゝ結為

又集中ゝ見氏志我相氏志賀やど
りゝ見氏河良志我毛相而有志賀
毛ゝ顧ゝ辨ゝ
るきわゝるゝゝ
びてゝうの而師と
ゝ氏ゝとりゝ人お
まなくゝもわ。
○後世の云ハ誤に。

見てゝ世てゝだ
どゝゝそゝも法。
誓ゝわゝ誓わ
しゝ世ゝわゝ。え
きわし。とゝゐて
かるゝゝハ多利の約
知ゝ氏ゝ軸ゝ
ゝ。

ゝも書ゝ。誓れゝばゝゝゝゝ引ゝゝあごもゝむゝてゝ上の義之大王
も。女氏志とゝまゝれゝばそゝ世弄の意をかゝゝるゝゝさてゝ先哥の
意をかゝ定めゝゝる上ゝ思ゝ。義ハ篆の字ゝてゝ篆籀の草基
をき方ゝ候まゝゝもれゝ。仍て考ゝて篆とまつ。○大王を氏
志と訓ハむゝ〳〵三韓人ハその主を國王といひゝんを。彼が言を
うけゝて孟朔ゝてゝもゝれの主をバ古伎志といひゝめゝ。唐ゝ
ゝれ使又ハ東方住ものゝどもハ。其王を天子ゝも大王ゝもい
ひゝん方ゝ。大王を即天子ゝといひてゝ。氏志の辨ゝ用ゝれ
ず。字音を又の字音ゝなゝゝて假字ゝゝゝるハ。韓羅を加良

と書て辛き事を用ゐ。十六を四ことまて鹿よかわ。僧を法
師として保志の假字とせんがめり。官名を神祇祐とわ國
の掾まぢく種々の字を用ゐたれど。皆政の音よ呼。又万都里
期登毘登。と唱ふるなども似る事。これらハ上つ代よあらば。
清御原藤原宮の次よわかり字の書をさゐぐこと然てかわり
中よハかるもなわ。
今本右の義之をきしと刪て。結束しいひ来してふ言と
せしいむがうこと。先義を清てきと唱ふる事なしも義
の字よやとうふ人あれど。古へも今もいひうしい結こうとを

いひていひきしい結きしいとうこうなるしばそもいそれず。
うの篆之大王を次よ挙しい手師結為云云ふむうて氏志と
いふ様あれを思ちで何ら疑ハん。

○八塩乃衣 呉藍ハ次の條よ挙

此巻。呉藍之。八塩乃衣云云。八ハ弥の畧。あまたびの意。塩
も。物よよくもこ入る。の名なれバ。借字ふぐ言の意ハ均し。
さて是ハ。八塩入の衣。とふ。ふるを。ふのハ入を畧て調へなり。記
に。垂仁天皇條。八塩折之紐小刀。てふハ刀の紐の色をいひてこと同
じ。又釀八塩折酒。とふも。物ハ異なれど。八塩折の言ハ均し。折ハ

借字まて〻入こ〻人を器
て利とのこりこ〻ハかなわ。

是ハ人の惑事ニ。そハ巻十九ニ。梅の花雪ふ志乎礼氏と
ゝハ。志ちるし多乎む事ニ。巻七ニ。今十為垂柳十緒てゝめく枝
も登乎ゝ〻も多和ゝ〻もいゝふ同じく乎の假字ニ。ゝ〻むもた
ゝむゝもいゝハ。初音の乎と志ちの和と隔遠ニ通りこ〻例なわ。こゝゝいゝ志保里ハ物を染入方
ちれバ。保のうふゝく事の本大ニ別こ。古人ハ。言の意を悉
ニ分知て。假字を以てすれ〻ちを定めるわ。後世ハ。を言
の言をそゝにんゝ〻ゝ。ゝ〻ぶわ
ニ出ぬあれ。

式ニ。韓紅花ニ元貫
布一端。紅花大四斤
元ゝ。中紅花貫布
一端。花大一斤四両
元ゝ。のゝ〻く紅花乃

○呉藍クレ井　韓藍カラア井

ゝれなる乃事ハ。呼巻右ニいへる。呉藍之ハ。鹽之衣。まゝ三苑
原之。雞冠草花乃。色出目八方。ゝゝ〻。和名抄ニ。辨色立成ニ引
て。紅藍久礼乃阿為。呉藍同上紅花俗用ゝ。といひ。そのかゝも多し。言ハ
呉乃阿為の乃阿を約て。久礼奈為ともいゝ。かくて系朝古ゝ〻
青藍を以て衣を染ゝ。呉の國より来ゝる紅花も同じ
衣染ゝもれなれバ。紅を呉のあかといいもゝ。ものゝ。又かゝ
藍てゝ。巻十四ニ。今ノ三吾屋戸尓。韓藍種生之。巻八ニ。今七秋去者。彩
毛將為跡。吾蒔之。韓藍之花乎。誰採家牟。彩を今本彩ゝゝく。巻七ニ。今十三

量の多くのこそ引るなり。

万葉の別き和と云へる源氏の古集あどにあらざるべし。別は数聚古集にて別し。

苑圃能辛藍花之色出尓来。などあわけ呉藍といひ韓藍と云
も共に種は同じものくさぐさむら〳〵中末まぐさしなる
て〳〵名のきこゆるをおもへば姑の呉の国よりわたり時うしなる
を名つけ。後に韓国よりもたらしかゝあるといふなるべし。さて
縫殿式に。韓紅花とこそはなづ深紅の事に。韓にそ染るゆゑ濃に
依てそれが根の深くを云なるべし。染種は黄紅花のこと。左に
類聚古集云。鴨頭草又作雞冠草云云。依此義者可知月草歌。
とよめるわざくさ是を鴨跖草ともいふ。多く生るもの
なれば。殊に庭園に植ゑるべし。仍て式にも見えぬ。雞冠

和名抄に楊氏漢語抄云。雞冠木加波波。
いろ〳〵の花を紅を取
きりのごとき紅花
を取れば紅花と似たる事ぞといふ。
或人は赤と今本に
書に彩もせんと
刷さく〳〵に更ひとり
夏花をまるのもの
まめまを蔭ぶせん
るもあるべきに秋
去者とはうら〳〵紅
も源〳〵なれば蔭
用なるべし。仍て
彩の字も無れ

草を更めて作るべき事ぞ。数聚古集にて別は古くもまぎ
れ紅人の事とそ云わけ。お染のすはまやくよりわたる考へ
るものなり〳〵。

或人は母衣に雞冠草花とそ云ふ。後世足ゆる雞冠草の
事ぞといふ。先紅花は茎丈は高さ尺あつ
まり成て。其房ごの赤き花の穂出めるさま雞冠（サキ）といふべし。さて
春種を蒔生し。六月七月の頃より花をまさに摘とりめしだ
紅の赤つむ花もよそ又右より引。妹さらば彩毛（クワモヒ）将為（モヒ）もよそ
るる。夏の末秋の始よりとりそめて後に深きは。秋去

者ありといひつ。雞冠花は古書にも見えず。今安房などにあまし
ものいへり。按るに後世他國よりわたりし物にや。もしさなくは秋にわたる
染種に為しもこの古へ聞えわたるを。延喜式に韓紅花てふ名のある
をも知らずや。

○恵具（ヱグ）与其（ヨゴ） 其和為（ゴワヰ）

此巻この。足檜之。山澤田具乎。採将去。日谷毛相将。母者責十方（コロフトモ）。
巻七（今ノ千）に。為君。山田之澤。恵具採跡。雪消之水尓。裳裾所沾（ヌレヌ）。なとあり
恵具を東國にては与其（ヨゴ）といひ。近江遠江越前などにては其和為（ゴワヰ）
といへり。土左國にては。やがて恵具（ヱグ）といへり。土左人のいへるに

葉は蘭（ヰ）に似ておさく内空くてやはらかし。且赤黒なる毛ありて叢
の本を包めり。堀取れば根は白く小さき芋ありて味わろし。是
の好み食ふ是東にて与ごといふ物と全く同じ。澤又田やせ所（ド）に生る
なり。武蔵の江門（ド）の此西四里ばかりに与其田てふ村の名もあり。過し
年近江の勢田乃里屋に休らひしに。女の田草取に出るとて児に向ひ
て。今日はごわゐ採て来んを。めしく待てよといへるを向ふに全く右
の土左人のいひしがめし。又遠江にては田夫のなす業の鈍（オソ）きをそしりて
て。昼はごわゐを拾ひて夜は秋田を𩛰（ハフ）といへり。越前にもひけしがくといへり。
恵具和蘭（ヱグワヰ）ても本ならず。今は恵具とよぶ。ゑぐとかたふは音通へば

浅井人けものとゝく
も尋ねぞ〜てお
さゝわよ恵ぐれゝゝ
るゝしゝ芹のれな
ぐいてるハつものすど。

与其（ヨゴ）といひ。遠江なゞゝてハ恵を畧さ具（グ）と其（ゴ）を結ぐゝ其和（ゴワ井）蘭と
いゝゝゝわ。

和名抄芋類ゝ烏芋 和名久和井。 生水中。澤瀉之類也。これハ本艸むてハ
さてもゝゝゝゝゝ。和名を挙ゝ附ハ先恵を和名をいひゝ次ゝ烏芋 俗久
和井。とゝゝかゝ。け久を清てりゝハ浅井の俗なり。且烏芋ハ恵ぐかゝゝ
紙ど。袋も芋も似ゝ烏多しバけ名をつけゝゝゝ。又澤瀉を
おゝぶふゝゝ。ゝ類ゝ芋ゝ。是をもゝゝるとりゝハゝ芋の恵を和
る烏芋ゝ似ゝゝとゝゝていゝ後の俗の呼ゝ名ゝ。和名抄ハ委し
かゝねゝ多し。